



報道発表資料の配付日時 7月5日(火) 10時00分

発表項目 (行事名)	第44回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」入賞者の決定について		
記者レクチャー のお知らせ	(実施日時)	発表者	
		発表場所	
概要	<p>◆全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール 全日本中学生水の作文コンクールは、「水の週間(8月1日から7日間)」の関連行事として、国が毎年実施しており、道としてもこのコンクールと連携して、昭和54年から北海道地方コンクールを実施し、今年で44回目となります。</p> <p>◆北海道地方コンクール受賞者 応募のあった115編の中から、最優秀賞(1編)、優秀賞(1編)、入選(5編)及び学校賞(3校)を決定し、北海道知事から賞状及び副賞を贈呈します。 なお、賞状及び副賞は発送済みで、個人賞(最優秀賞、優秀賞及び入選)の賞状及び副賞は所属中学校を通して伝達することとしております。</p> <p>◆全日本中学生水の作文コンクール中央審査 最優秀賞1編は、全日本中学生水の作文コンクール中央審査の対象として国土交通省に推薦しています。 なお、中央審査において受賞した際は、再度、受賞内容等を発表させていただきます。</p>		
参考	<p>◆北海道地方コンクールの概要・・・別紙1</p> <p>◆入賞者一覧・・・・・・・・・・別紙2</p> <p>◆最優秀賞作品・・・・・・・・・・別紙3</p>		
報道(取材)に当たってのお願い	<p>◆このコンクールは、北海道として、「水の週間」を広く啓発するための行事です。</p> <p>◆これからの北海道を担う若い世代に水の大切さや北海道の自然、世界の環境問題などを考えてもらう絶好の機会としてこのコンクールの存在や意義を広くアピールしたいと考えています。</p> <p>◆今回の入賞者の決定について積極的な報道をしていただきますようお願いいたします。</p>		
他のクラブとの関係	同時配付 同時レク	※道政記者クラブ、渡島総合振興局記者クラブ、上川総合振興局記者クラブ、留萌振興局記者クラブ、オホーツク総合振興局記者クラブ	
担当 (連絡先)	空知総合振興局地域創生部地域政策課地域政策係 (担当者:安田) TEL 0126-20-0030		

## 第44回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」の概要

## 1 目的

「水の週間（8月1日～7日）」の行事の一環として国が実施する「全日本中学生水の作文コンクール」と連携し、北海道においても次代を担う中学生を対象に「北海道地方コンクール」を実施し、広く水に対する関心を高め理解を深めることを目的とする。

## 2 応募要領

## 第44回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」応募要領

国民の間に広く健全な水循環の重要性についての理解と関心を深めるようにするため、水循環基本法（平成26年7月施行）第10条において、8月1日を「水の日」と定め、あわせて、国では、この日からの一週間を「水の週間」とし、「全日本中学生水の作文コンクール」を実施するなど、毎年様々な行事を行っています。

北海道においても、この「全日本中学生水の作文コンクール」と連携し、次代を担う道内の中学生を対象として、「北海道地方コンクール」を次のとおり実施します。

なお、北海道地方コンクールの最優秀作文は、「全日本中学生水の作文コンクール」の中央審査に推薦します。

## 1 テーマ「水について考える」（題名は自由です。）

水は、地球上の全ての生命の源であり、特に私たちの生活の営みや農業・工業等にとって不可欠なものです。一方、水は、「恵み」の一面もあれば、豪雨や洪水、渇水などの「災い」という一面もあります。

また、私たちの暮らしは、水によって支えられていますが、地球上の水は無限ではありません。私たち一人一人が水循環の重要性を理解し、水との関わり方を学んで、水の恩恵を享受し続けるために、何をすべきか考えることが重要です。

あなたにとって、水とはどんなものですか？暮らしの中での体験や授業で学んだこと、調べたことをもとに、水についての考えを作文にまとめてみませんか？

## 2 主催・後援

主 催 水循環政策本部、国土交通省、北海道

後 援 北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道中学校長会

3 応募資格 令和4年度（2022年度）に在学中の道内の中学生（中学生と同じ学齢の者を含む。）

4 原 稿 400字詰原稿用紙2枚以上4枚以内（800字～1,600字以内）で日本語により表記された個人作品に限ります。

5 応募期限 令和4年（2022年）5月6日（金）（当日消印有効）

6 応募方法 作文には、本文の前（原稿用紙枠内）に「題名」、「学校名（ふりがな）」、「学年」、「氏名（ふりがな）」を記入し、次の送付先に送付してください。

なお、個別の題名は自由です。

7 送付先 〒060-8588 札幌市中央区北3条西6丁目  
北海道総合政策部計画局土地水対策課調整係（TEL 011-231-4111 内線23-741）

8 審査 5月に「北海道地方コンクール」の審査を行い、入賞作文を決定します。  
なお、最優秀賞作文は国土交通省が実施する「全日本中学生水の作文コンクール」中央審査に推薦します。

9 賞及び賞品 (1) 最優秀賞 1名（賞状及び副賞）  
(2) 優秀賞 1名（賞状及び副賞）  
(3) 入選 3名程度（賞状及び副賞）  
(4) 学校賞 5校程度（賞状及び副賞）

10 賞の発表 賞は6月に発表し、所属中学校を通じてお知らせするとともに、賞状及び副賞を送付します。

11 使用権等 (1) 応募作品は自作の未発表のものに限ります。  
(2) 応募作品の使用権は主催者に帰属します。  
(3) 応募作品の返却は行いません。

## 12 その他

(1) 入賞者については、入賞作文の内容、学校名、学年及び氏名を国土交通省及び都道府県のホームページや作品集に掲載するほか、報道機関を含めた関係者へ提供しますので、予めご了承の上、ご応募ください。

(2) 本コンクールの応募作文に記載される個人情報、本コンクールの運営に必要な範囲内で利用します。

また、応募者の同意なく、本来の利用目的を越えて転用することはありません。

## 参 考

国土交通省が実施する中央審査の賞（予定）

（１）最優秀賞 内閣総理大臣賞１名（賞状及び副賞）

（２）優 秀 賞 厚生労働大臣賞、農林水産大臣賞、経済産業大臣賞、国土交通大臣賞、環境大臣賞、全日本中学校長会会長賞、水の週間実行委員会会長賞、独立行政法人水資源機構理事長賞、シャワーズ賞 各１名  
中央審査会特別賞（賞状及び副賞）

（３）入 選 30名程度（賞状及び副賞）

（４）佳 作 上記受賞者を除く全員（記念品）

※ 最優秀賞、優秀賞受賞者の表彰は８月頃に東京都内で行われます。

## 第 44 回「全日本中学生水の作文・北海道地方コンクール」入賞者一覧

## 最優秀賞

作 品 名	氏 名	学校名及び学年	管内
水が持つふたつの顔	三浦 かな	下川町立下川中学校 2年	上川

(敬称略)

## 優秀賞

作 品 名	氏 名	学校名及び学年	管内
水の恩恵への感謝を忘れずに	成田 美碧	函館市立白尻中学校 3年	渡島

(敬称略)

## 入 選

作 品 名	氏 名	学校名及び学年	管内
自然と水と私たち	石黒 彩乃	当麻町立当麻中学校 1年	上川
生命の恵みと向き合い、生命を生かす	上野 優月	函館市立白尻中学校 3年	渡島
水不足の現状と人々の意識	田邊 椎花	岩見沢市立北村中学校 3年	空知
過去から未来へ繋ぐ水	森下 和奏	長沼町立長沼中学校 2年	空知
「飲める水」を分け合うために	渡邊 楓	留萌市立港南中学校 3年	留萌

(敬称略、五十音順)

## 学校賞

学 校 名	管内
岩見沢市立北村中学校	空知
北見市立相内中学校	林-ツク
当麻町立当麻中学校	上川

(敬称略、五十音順)

## 水が持つふたつの顔

下川町立下川中学校 二年 三浦 かな

水は、人の命を守るものであり、また命を奪うものでもある。私は、二つのケースを例に、水について私が考え行動したことを書こうと思う。

「み、水、、みず」うめく妹に、母は、ずっとペットボトルのキャップに水を入れて少しずつ飲ませていた。たった六百五十グラムの水が失われただけで、こんなにも人が弱ってしまうなんて。

妹は、送迎バスに取り残されて、二時間半後に発見された。意識はもうろう、顔が真っ赤で熱もあがっていた。何より、ずっと水を欲しがっていた。症状からすると、妹が失った水の量は四～五パーセント。体重が十三キロだった妹の身体からおよそ六百五十グラムの水が失われた。夜もうなされて元気になるまで何週間もかかった。今となっては妹も元気だが、この出来事は、私たちに水と命について考えるきっかけをくれた。

私たちが生きていくのに必要な水の量。これは、体重が多ければたくさんの水が必要になるが、体重一キロ当たりに必要な量は年齢が低いほど多くなる。一歳だと、百二十～百三十五ml/kg、六歳だと九十～百ml/kgの水分が一日に必要な量になる。

私たちは、喉が渴けば自分で水分補給をすることができる。しかし、小さい子どもはそれができない。お年寄りにも難しい人もいるだろう。まわりにいる人が、お年寄りや小さい子どもに気を配っていくことが大事だと思う。脱水症の予防には、「こまめな水分補給」が重要だ。私たちは、常に水によって命を守られているということを実感しなければならない。

二つ目のケースは、水難事故。毎年、水難事故によって多くの子どもが命を落としている。着衣水泳の教室に参加したが、服を着た状態でいきなり水に落ちると、浮いた状態を保つのがとても難しいことがわかった。妹のような小さい子どもは、浮き具がなければ浮くこともできなかった。川や海に近づかなければおぼれることもないが、川や海には、不思議な形の石があったり、砂の感触が面白かったり、本では学べないことがたくさんある。

これらの気づきから、私はライフジャケットステーションを設置する活動を始めた。人間は、肺に空気が入っている場合でも最大で人体の五パーセントしか海に浮くことができない。しかし、ライフジャケットを正しく着用していれば、生存率が四割から九割にまで上がる。また、水辺へ出かける時は、事前に天気や水辺の情報を調べて必ず大人と出かけることが重要だ。水辺へ出かける時の注意点を掲示し、ライフジャケットを無料で貸し出す場所を作るために、募金を集めたり、お小遣いを貯めている。実現まで、あと少し。

妹の事故をきっかけに、私は水の大切さと恐ろしさを知り、特に子ども達と子どもを守る大人に安全な水との付き合い方を知ってもらうことが必要だと感じた。残念ながら、私たちは当事者になるまで大切なことに気づきにくい。

今年は、一人でも、水の事故で亡くなる人が減るように、そしてきれいな水環境を守るために私ができることを一生懸命頑張っていきたい。